



贗作 見えない都市 - 解と複数の舞台による都市の劇場化計画 -

「見えない都市」は、地上と地下の2つの空間軸（「ドラス」）を軸として行われます。
では、様々な道路が重なり合い、ぼんやりとぼんやりと、電車は数分たつと必ずやってくる、そんな日常の風景が描かれます。
そこにはまるで「ローマ」のよう、昔の街と名前だけ違えば同じような風景が広がっています。（イタロ・カルヴィーノ「見えない都市」より一部改題）

見えない都市

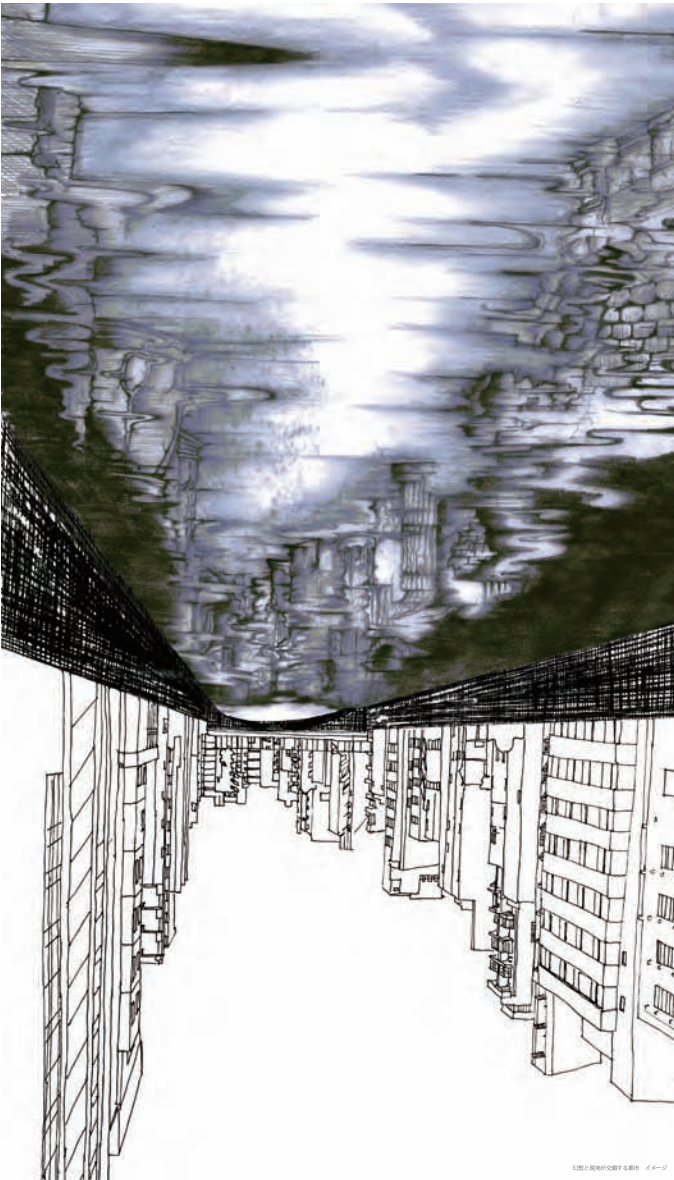
／イタロ・カルヴィーノ 「見えない都市」
イタロ・カルヴィーノの「見えない都市」という本がある。
マルコ・ポーロによる、フビライハンへの諸都市の報告の形をとった小説である。
フビライは、広大すぎる帝国を全て見る事ができず、その報告から都市の姿を頭の中に描くことで、帝国を把握しようとする。そこでは、時間、現実と幻想が交錯し、こうした見えないものを見ようとする行為の中にのみ発生する都市の姿が描かれている。フビライと、現代の都市に生きる私達は、非常に似通っている。

1960年代マクラーハンが述べたグローバリゼーションの概念にあるように、グローバリゼーションの発展は、時間と距離の概念を多くの部分で喪失させた。立体的に発展した交通網が、時間と距離の体感を失わせ、東京は既にその構造に時間の偽造を内包している。
また、都市の差異も失われつつある。例えば1990年代後半、特定の趣味の共同体として発展してきた秋葉原も、大衆的施設によって、その特殊性は大きく失われた。多様な人間集団の共生をよとする「人間工学的に正しい」都市に対し、個性の強い都市は生き延びることができないのだ。むしろ私達は、そこに想像にのせて、秋葉原という個性ある都市を認識しようとしているにすぎない。



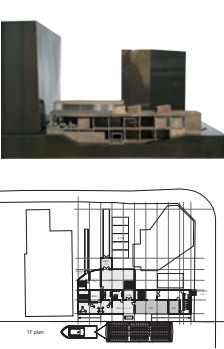
都市の演劇性

／ピラネージ「ローマの古代遺跡」
現実と幻想の狭間の都市の姿を重ね合わせた絵として、ピラネージのローマの廃墟版画をあげる。ピラネージの版画の人間達は、どこか演劇的だ。同様に、東京も既に劇場化している。無意識の役者はいくつかの観客のいない劇場。
都市に日常をすっかり取り囲まれ、当事者として生活する私達には、都市はなかなか劇場として見えてこない。そこで東京を、改めて劇場として認識するための装置を計画する



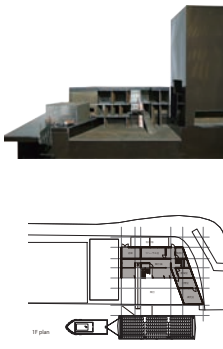
都市を劇場として眺める為の装置 7つの舞台と遊歩道を巡る船

1の舞台「出航」



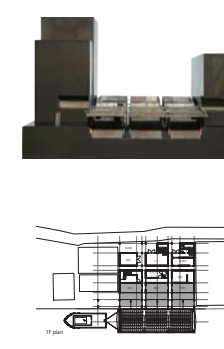
船着場としての機能を持つ舞台から、船が出航する。出航という劇的な場面に遭遇する登場人物。観客、役者、都市の人々……。彼らは同じスクリーン上に登場し、出航を見送る。演劇の1番の主役は、観客を乗せた船となって都市の視線を集める。

2の舞台「閉鎖」



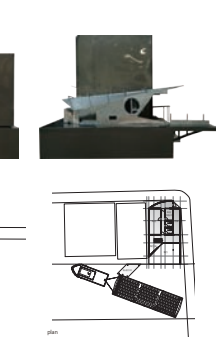
集まった都市の視線を拒否し、船と向き合って閉じる舞台。いよいよ物語が始まる。役者と観客との間だけで秘められた世界。都市から隠れるように沈み込んだ世界。これから始まる物語における、客と役者の一体感が生まれる。

3の舞台「視線」



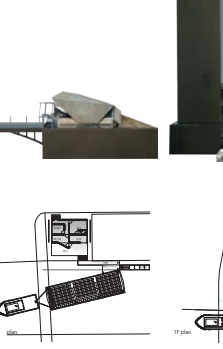
船が停泊した時にのみ、完成する舞台。観客は舞台を覗き込み、屋根によって閉ざされた空間を体験する。しかし地上には、船から見えない形で観客席があり、船の観客は、いつの間にか見る側から見られる側へと気変わっていく。

4の舞台「空洞 -1」



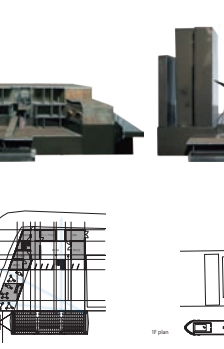
向かい合わせにある2つの舞台。船は2つの舞台を巡って、川を大きく旋回する。大きな船の動きはそれ自体演劇のように橋をわたる人の目にうつる。

5の舞台「空洞 -2」



閉鎖と似た構成の舞台。時の流れを明確に感じられる船にしながら、観客達は既視感におそわれ時間の感覚を失う。それは新たな物語の世界への入り口でもある。都市に開放されたこの舞台で、船の人々は地上の人々と共に舞台を楽しむ、互いに見合いの関係を持つ。

6の舞台「既視感」



最後の舞台。既にここに演劇はない。あるかもしれないが、日常との区別はつかない。都市の人々は、船着場を訪れるかのように舞台を訪れ、船の人々が眺める舞台は、その人々の日常的なふるまいであつたりする。

7の舞台「都市」



船から眺める都市の一部

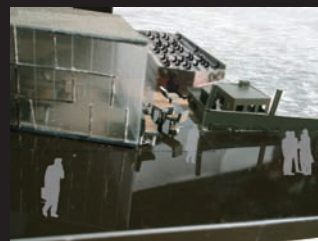
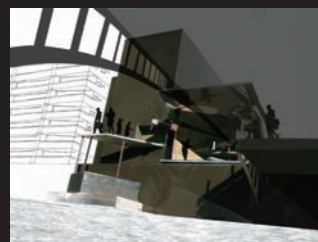
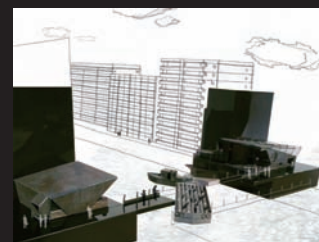
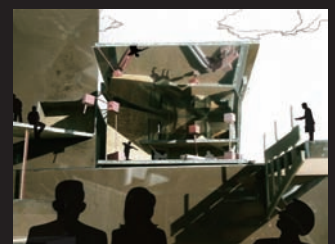
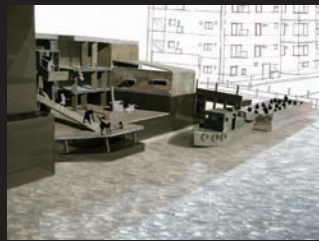
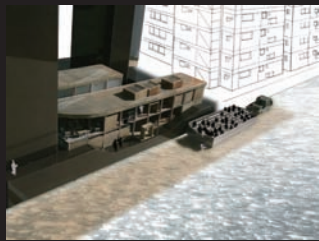
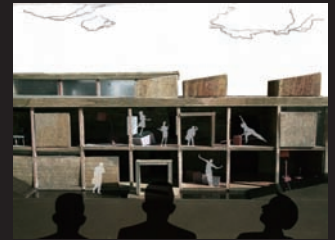
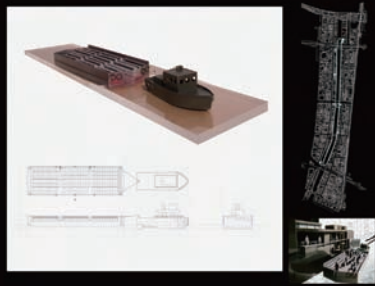
／「客席」舞台を巡る船
東京中を網羅する地下鉄に対し、東京を網羅する川を移動する船。貨物船としての船を客席として利用する。物ではなく、運ばれる人。地下鉄と対比して目に見える移動。

舞台の配置計画と船の巡回計画

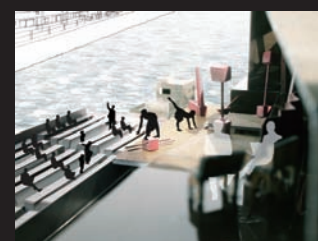
敷地は秋葉原、JR秋葉原駅、都営新宿線岩本町駅、都営浅草線浅草橋駅に囲まれた地域とする。線路は、目に見える現実、見えない幻想の象徴で、その狭間が計画地となる。
敷地には和泉橋防災船着場があるが、通常は閉鎖されており、橋の高さが低いこともあって、この川はビルに覆われた都市の裏側ということが出来る。普段目にしないこの場所を劇場として計画する。
舞台は川に向かって開き、陸地に対して閉じることによって、現在の都市の姿を反転させる。
ビルの隙間や児童公園、空地などを利用して7つの舞台を配置し、都市と舞台を同時に体験する船のモデルルートを描いた。観客は船に乗って舞台を順番に巡りながら、その間の遊歩道で都市の日常を垣間見る。

7つの舞台を巡るシナリオとアニメーション

それでは、見えない劇場を見る為のシナリオを辿る



ここで、船は大きく旋回し、
折り返して進む。



これで舞台は終了する。船は船着場に向かう。

